

ダブルネーム・シルクスカーフ限定販売のご案内

富岡シルクブランド協議会は、横浜スカーフの原型を発案した横浜発祥の老舗絹製品メーカー「椎野正兵衛商店」との共同で、シルクスカーフを製作しました。

市内の養蚕農家が丹精込めて育てた繭を碓氷製糸農業協同組合で生糸にし、撚糸、白生地を経て、同商店でデザイン、捺染、縫製を行いました。

大きさは、大判(90cm×90cm)と小判(58cm×58cm)の2種類。大判のデザインは、梅、藤。小判は、桜(ピンク・グレー)、梅(パープル・ライトパープル)があります。昨年の洞爺湖サミットにおいて、各国首脳夫人らに送られたシルク風呂敷も、同商店に製造を依頼した経緯があります。

かつて、富岡製糸場においても、「良質の糸をひく」というものづくりに対する真摯な精神が脈々と引き継がれてきました。今回、このスカーフに込められた「富岡の繭で、本物のスカーフを作りたい」という情熱をご理解いただき、ご購入いただきたいと思います。

販売日 11月1日(日)~売り切れ次第終了

※年末の3日間は販売はありません

販売時間 午前9時~午後4時30分

支払い方法 電話でご注文後、現金にて支払い

受付場所 富岡製糸場

販売価格 ▷大判 18,900円 ▷小判 12,600円

問い合わせ 世界遺産推進課(富岡製糸場内 ☎64-0005)



近代産業の夜明け 富岡の 明治維新

83

明治24年、富岡製糸場の公売が発売され、2者が応札したが、政府が予定した元価より入札価格が低いために、不成立に終わった。

その翌25年には、農商務大臣の陸奥宗光が枢密院顧問官に転じ、後任の農商務大臣を受け継いだのが河野敏謙である。河野大臣は所長の速水堅曹を出京させ、「富岡製糸所は当分官有のままとし、全て速水君に任ず」と約束した。

しかし間もなく河野は内務大臣に転じ、その後任となったのが後藤象二郎である。

遑つて、明治23年に第1回の帝国議会が召集されたのであるが、諸官庁の長である各大臣もしばしば交替劇が繰り返された。

後藤象二郎は大臣就任の3か月後に多数の随行員を引き連れて、富岡製糸所を視察している。これは製糸所の実態を具体的に知り、いかなる措置を講ずることがたいせつかを見極めるためであった。

そして間もなく、製糸所の公売が再燃した。これを知った速水所長は出京して後藤大臣に面会し、「製糸所の経営を継続できないうような実力のない者には、払い下げをしないで欲しい」と訴えた。

実はその頃、人を介して板垣退助から払い下げを受けたという申し出があった。速水は、「板垣伯爵といえども資金力はないはずである。もし彼が興した自由党などの玩弄物となるならば、国家の損失である。彼の真意が分かるまで信用できない」と断ると、やがて板垣自身が富岡製糸所に来訪し、1泊しながら真意を語った。

彼の本心は「有志を集めて当所を益々盛んにし、国家の基本業とした」ということであり、我欲ではないことが分かった。

そこで速水は「どうしても必要ならば、他人が落札する前に国会で議決し、特別の払い下げの形を取るべきだ」と述べると、板垣は「そのことを所管大臣と相談してみたい」と言って帰郷したが、それ以降、何の連絡も来なかった。

しかし、富岡製糸所の公売計画は着々と進行していたのである。

(今井 幹夫)

富岡製糸場の歴史を紹介しています。過去に掲載されたものを見たい場合は市長公室にお問い合わせください。

赤れんが写生大会 市長賞に佐藤虹也さん

第28回赤れんが写生大会が9月5日に開かれ、その表彰式が9月27日に美術博物館市民ギャラリーで行われました。富岡製糸場では、毎年開催されているこの行事。今年は富岡市長賞に佐藤虹也さんが選ばれました。今年もたくさんの人に絵を通して富岡製糸場の魅力を感じていただけたと思います。その他、特別賞は以下のとおりです。教育長賞・磯貝和奏さん、市議会議

長賞・石田友里さん、文化協会長賞・新藤桜さん、青年会議所理事長賞・藤木予太郎さん、審査委員長賞・神戸永遠さん、しのめ信用金庫理事長賞・渡辺香菜子さん、JA甘楽富岡組合長賞・尾崎太紀さん、絵手紙サークル賞に村上祐子さん。



市民の文芸

漢詩

看梅
驟暖午天登小丘
春風習習白雲悠
水肌玉骨美於畫
脈脈幽香醉暫留

探梅

清溪歩歩鳥聲頻
麗日勝遊詩思新
入路寒村春靄靄
佳人疎影興尤眞

春遊

逍遙行聽暮鐘時
春遍芳園淺水涯
兒女花堤追野蝶
吟人柳浪愛風姿

俳句

新米の湯気のががやく炊飯器
軟らかく長く尾を引く秋の雷
母の笑むやうなそよぎの稲の花
朝寒し指の利かざる母卒寿
銀木犀杖の吾の道しるべ
赤と白のワイングラスに夏料理
部活動引退間近秋の空
うろこ雲さんちよう感をほくしてく

高橋 洋一 選

(下黒石) 吉田シズ江
(富岡) 折茂 昭
(曾木) 入山 静子
(野上) 小金沢基久江
(宇田) 入山 一三
(後賀) 湯山 典子
(曾木) 曾根はるな
(曾木) 曾根 静華

齋藤 清次 選

新秋即事(七日市) 青柳 重雄
晩来の爽氣 涼を喚くの時
切々たる虫声 屋を透りて滋し
風信 庭に過りて一葉翻り
秋懐 坐ろに覚えて新詩を賦す

秋日郊行(富岡) 古閑 美代

西郊 一路 野花薫り
残蝶 行ゆく追えば十里の雲
忽ち聴く疎鐘 秋色の裏
村園 柿は熟して喜び欣々たり

秋日郊行(一ノ宮) 都竹よし子

金風 面を吹いて新晴に入る
十里の西郊 吟履軽し
赤卒 何れより来たるや秋興好し
薔花 一白 野情清し

短歌

宮前 しづゑ 選

彼岸花はなやぎ咲ける奥津城に四十九日の妹納むる
(白岩) 金井 幸子
早く閉ちて夕べ見ざりし朝顔の今朝むらさきに七つほど咲く
(下丹生) 松本 久枝
コスモスの色とりどりに咲き誇り信濃の街道賑はひてをり
(上丹生) 高橋 恵子
焼きいも売りの言葉真似つつ仏壇に初穫りの甘藷は上げぬ
(七日市) 恩弊 森造
上蔭の手ばりし友より応援を頼むの電話快く受く
(下高尾) 金田てるじ
函館の明け方五時に市開き戸音足音呼び声ひびく
(下高尾) 小林 勝明
火まつりの行事の歴史は千二百年夜空に「美」の文字孫子らと見る
(七日市) 新井 逸子
こおろぎの大合唱を聴きながら今宵もゆつくり半身浴す
(七日市) 飯塚有紀子
細き葉の茂れる中よりヤブランの紫穂花のあまた立ち咲く
(七日市) 宮 和子

川柳

黛 猛 選

置き換えて見れば治まる腹の虫
蟻螂が斧振り上げて後退り
三世代写った写真コピー顔
蓮の葉を揺すって威す赤蛙
酒豪だと自慢するが二日酔い
育毛剤振ってがんばる共白髪
秋風に妻は秤を遠ざける
通夜の席喪服姿について見惚れ
カラオケで実らぬ恋に涙する
敬老会忘れ過ぎていひと日